コメント

稲葉　ソイダン先生にこのパネルの発表及び議論についてコメントを頂ければと思います。ソイダン先生、コメントいただけますでしょうか。

ソイダン　どうもありがとうございます。この機会をいただいて嬉しく思います。特に一言申し上げることに、発表について意見を申し上げる機会をいただいて嬉しく思います。まず第一に全体的な成り立ち、皆さんがやっていらっしゃるプロジェクト、発表というのは非常に印象的でした。非常に学際的でいろんな側面を見ており、非常に実証的、経験的なアプローチでありますし、理論的なアプローチもありますし、非常に有望なプロジェクトではないかと思います。２度私のキャリアの中でこのような大きな試みをやったことがあるのですが、全体で10年ほどかかりました。その成果の一つには、プロジェクトの最後に多くの経験と知恵を得ることができるということがあります。またそれをどうやって続けていくか、持続させていくか、その経験をどのように持続させていくかということが課題になります。人は移り変わっていきますし、組織は長い期間存続しますが、どのようにこの情報を次の世代につなげていくか、移転させていくか、そして次の世代を中に入れていくかというのがこの種の集団的な知恵を進めて行く上での課題になるかと思います。

プロジェクトをどのように運営されているか、どのような研究を実際にされているか、どのようなプログラムを実施されているのか非常に興味深い点がありました。予見的支援、伴走的支援、修復的支援と実践されている色々なバリエーションがあります。稲葉先生はインターネットの検索で、社会的包摂というキーワードで簡単に100以上のタイトルを見つけられたと仰っていました。それは主に移民や民族多様性の文脈でのものでしたが、このプロジェクトはそれをさらに広い意味で促えました。非常に賢明だと思います。このプロジェクトは、より多くのニーズに合わせて行く必要があるかと思いますので、既存のどこかから引っ張ってきた概念では表しきれないからです。私はこの大きいプロジェクトで皆さんがやっていらっしゃることを支援したいと思います。

先ほど会場からもご質問が出ていましたが、また松田先生も仰っていたかと思いますが、包摂と排除という二つのコンセプト、これはヨーロッパ連合でも

用いられたコンセプトです。例えば新しい国がEU に入るべきかどうかということが1980年代、あるいは1990年代にとても大きな問題になりました。ですので、ヨーロッパの文脈におきまして、包摂とか排除というコンセプトは、EUにおける共生社会の実現という枠組みの中で考えられるべきでしょう。それから、社会の中での共生ということについて、ある意味ではこういうコンセプトは時代とともに変わることもあります。時代によってはネガティブな意味を持つこともあれば、ポジティブな意味を持つこともあります。しかし、時代によってはネガティブな気持ちを引き起こすこともあり、時代とともに変わっていくと言えるでしょう。また、共生的な社会、個人的には人類学の研究でも文化の統合ですとかそう言った面で研究がなされていると思います。社会における共生、これはヨーロッパの統合の政策にも反映されてきたものです。つまり新しい国、新しい加盟国を統合、機能的に統合していくのか、ということだけではなくて、様々な民族と文化的にどのように共生していくかということも含まれていました。

松田先生が仰っていたことですが、また先生が書かれた論文も先ほど読ませていただいたんですが、国際化という側面について、なぜか日本やその他のアジアの各国が、よく参照されたり比較対象とされることがあります。私の心に浮かんだ疑問ですが、なぜこのような戦略が取られるのか、その根拠がどこにあるのか、どのような類似性、相違点があるのかということです。アジア各国以外にも目を広げて見ることにも意味があるかもしれません。この類似性というのは、もしかしたらアジア圏内ではなくてアジアを超えた国々にも見出すことができるかもしれません。なぜアジア各国で比較がされるのかということを単純に疑問に思いました。地理的に近ければ似ているのかということも考えられますが、どうでしょうか。私は１年間に数回は中国や韓国に行きますが、そのたびに２つの国の違いに驚かされます。ですので、私の経験に基づきますと、国が近ければ似ているのかというのも疑問です。

以上かと思います。このような機会をいただきましたことを感謝申し上げます。ありがとうございました。

稲葉　ありがとうございました。これでパネルディスカッション全体を終了させていただきます。登壇していただいた先生方、ご質問いただいた先生方、ソイダン先生、どうもありがとうございました。